

(別紙様式 2)

普及指導員調査研究報告書

課題名: 集落営農法人による県オリジナルユリ球根増殖により 275 千本の共販を目指す (農事組合法人「松屋」の経営安定)

下関農林事務所農業部 担当者氏名: 村上正徳、岡陽一、齊藤雅美

<活動事例の要旨>

集落営農法人へのやまぐちオリジナルユリ (以下ユリ) の球根増殖の試作を通して、経営の安定化をはかるため各種確認ほを設置し、本格導入に向けた支援を実施し、その結果、平成 25 年度より本格栽培が実施されることとなった。

1 普及活動の課題・目標

(1) 対象の概要

ア 農事組合法人「松屋」(以下法人: 平成 24 年 1 月設立)

組合員 103 名、栽培面積 74 ha、売上高 69 百万、営業利益 12 百万円 (平成 25 年度事業計画: 水稻 73 ha、飼料稲 2.6 ha、カボチャ 33 a、キャベツ 110 a、ゆり 15 a)

イ JA 下関花き部会オリジナルユリ専門部会 (以下専門部会)

平成 14 年に県オリジナルユリの産地化を契機に設立され、平成 24 年度、部会員 12 名、共販出荷本数 72 千本を県内外の花市場に出荷

(2) 課題化の背景

県、JA 下関の平成 26 年度の下関におけるユリの販売計画は 275 千本である。この販売計画を実現させるためには球根の確保が必要である。

専門部会が県に要望した球根数は入手が困難なため、必要数を確保するのに、専門部会員による自家増殖や、専門部会の組織的な球根確保の活動としてユリ以外の切り花生産農家に球根増殖を依頼したが、家族労働だけでは増殖面積は限定的となった。

そこで、平成 24 年度関係者で協議し、集落営農法人 (以下法人) へ球根増殖の試作を依頼し、技術支援を実施することで、本格導入を目指した。

2 普及活動の内容

(1) 平成 24 年度作 (試作: 栽培面積 1 a、平成 24 年 12 月～平成 25 年 6 月)

球根増殖法人を選定し、試作を依頼した。次作については、この結果 (労働時間、作業性、収益性) により改めて協議することとなった。

適期作業を行うため、女性部が結成された。また確認ほを設置し、法人と情報を共有化し理解を深めた。

園芸品目で球根増殖の生育が大変良く、収量が目標を上回ったこと、経営収支の赤字は、高賃金が原因であることが、理事会で理解された。これにより、平成 25 年作は面積を拡大し本格的に栽培することとなった。

(2) 平成 25 年度作 (本格生産: 栽培面積 10 a、平成 25 年 7 月～)

平成 25 年度ほ場が干拓地水田であり、ほ場整備後、作付けされていないほ場であったため、ほ場調査を実施し、対策を実施した。

球根は専門部会と協議し、専門部会内増殖として位置づけ、平成 24 年作と同様に球根の全量買取を行うため、専門部会員が要望する品種を選定した。

3 普及活動の成果

(1) 球根増殖の試作結果

ア 球根の収量 (a 当たり)

目標より球根の収量は20%増収、想定していなかったりん片が83kg収穫ができた。これは、ほ場選定が良かったことと小球根が6cm程度と大きかったためと考える。

イ 労働時間の把握及び削減並びに作業改善

労働時間の指標では10a当たり500時間で、単純計算では1a当たり50時間となるが、試作結果はその約2倍の約100時間となったが、定植方法の改善と収穫の機械化、除草剤の利用により、73時間に短縮できることがわかった。

ウ 経営収支

法人の労賃が高いため切り花用球根の収益だけでは1aあたり94千円の赤字で、機械化及び除草剤による作業改善を実施して54千円の赤字となった。そこで、市内の法人の平均労賃よりやや高い金額で、収支を計算すると31千円の赤字、作業改善の実施で7千円の赤字となり、経営収支の改善の目処がたった。

(2) その他

ア 法人の経営改善

(ア) 労賃

前述のように他の法人の労賃との比較で、高労賃を認識し、改善に向けての協議することができた。

(イ) 女性部

女性部が結成され、女性が一般作業を行うことで、きめ細かい管理により収穫物の品質の向上につながった。

(ウ) 排水対策の重要性の認識

排水研修を実施したことで、露地品目を栽培する上での排水の重要性が認識され、明渠用の作業機導入の機運が高まっている。

イ オリジナルユリ専門部会への高品質な球根提供

現在のところ法人から供給された球根によるウイルス病の発生や生育障害の発生はない。

4 今後の普及活動に向けて

(1) 球根増殖の作業改善

平成25年作は球根増殖面積が10aと増加したが、販売計画を実現させるには、さらなる面積拡大が必要となる。その解決には以下のことが考えられ、今後とも、球根の確保に向けた支援を行う。

ア 労働時間のさらなる短縮

全作業時間の42%を占める調整・パッキング作業の機械化の検討。

イ 除草剤

花き類登録の除草剤は少ないが、効果の高い剤の導入。

ウ 現地試験「オリジナルユリの秋肥大球根生産技術の開発」

有望な技術と考えられるため、今後導入を検討。

(2) 経営の複合化

女性部ができたことで、女性の労力を活用し、増殖した球根を利用した切り花経営を導入する。